

心地よい音色に癒やされて オカリナづくりと演奏を楽しむ家

心地よい音色に癒やされて
オカリナづくりと演奏を楽しむ家



真剣なまなざしでオカリナ作りの工程を説明する安藤さん



安藤 信也さん

川田町にある廃業した企業の敷地内に、オカリナづくりをする安藤さんの「カノーロオカリナ工房」があります。全国のオカリナ愛好家の中でも、オカリナづくりの注文がくるほどの製作を趣味にしている人は多くありません。

今回は、趣味のオカリナづくりをライフワークに楽しむ、安藤信也さん(播磨田町)取材しました。

野洲川沿いにかくれ家 オカリナ製作と演奏の工房

オカリナは素朴で澄んだ音色が特徴の土笛で、19世紀にイタリアで生まれた伝統楽器です。

安藤さんは4年前、川田町の野洲川近くにオカリナ作りの「カノーロオカリナ工房」を持ちました。廃業した会社の敷地にあった物置を借りたものです。

試行錯誤を重ねた粘土や自作の型、道具類などが所狭しと置かれています。

エアコンもない小さな工房ですが、安藤さんは気候の良い季節になると、ほとんど毎朝工房に出掛けます。人けの少ない戸外で春には薄墨桜の下、夏には野洲川の吹き渡る風の中で自作のオカリナを演奏すると、心地よい音色に心身が癒やされるといいます。工房名の「カノーロ」も、そのまま「心地よい音色」という意味だそうです。安藤さんは「オカリナづくりと演奏が思いついてきて、時にはお茶を飲んだり読書をしたり。工房はかくれ家みたいなものです」と笑顔で話していました。

陶芸の楽器づくり 難しいから面白い

安藤さんがオカリナに出会う

たのは、定年を迎えてレイカデア大学の「陶芸科」を卒業するころでした。もともと油絵や陶芸が趣味だったことや、音楽が好きだったことから「陶芸の楽器づくり」に興味を持ったといいます。

インターネットで調べ、子ども向けのオカリナづくり教室に参加し、オカリナ作りと演奏を体験させてもらいました。

いわれる穴の調整には、0.1mm単位の精度が要求されます。安藤さんは「吹きやすさと音色が同じオカリナは二つとして作れない。その奥深さがあるから、こんなに夢中になったのだと思います」と話していました。初めて作ったオカリナから、10年間で1091本を作り、9割は納得できずに捨てたといいます。

それから安藤さんの独学での試行錯誤が始まりました。オカリナは粘土、形、焼成温度などによって音色が変わり、特に吹き込んだ息が音に変わる「歌口」と

安藤さんは「オカリナの魅力

は、一握りの粘土の塊から楽器が作れて、自分で演奏できて、その音色に癒やされること」と話します。

この夏、エルセンターで小学生を対象にした「オカリナづくり教室」を開催しました。粘土をこねて型に合わせて成形、乾燥できたら焼成して絵付け。数週間も待つて完成したオカリナの吹き口に口を当てて、どきどきしながら吹いてみる。「ピー、ピー」と音が出た時の子どもたちの満面の笑顔を見ると、安藤さんもうれしくなるそうです。

慰問演奏やオカリナ教室 コロナ収束の日を夢見て

安藤さんは滋賀県オカリナ協会の事務局も担っており、多くの人に魅力を伝えたいと考えています。この数年は新型コロナウイルス感染症の影響で、オカリナ作りの楽しさを伝える機会も、演奏をする機会も減ってしまいました。

のように再開された時のため、安藤さんの目下の夢は、オカリナ演奏で登竜門といわれる曲「ソンドルは飛んでいく」を練習して、しっかりと演奏できるようにすること。そして、さらに吹きやすくて良い音色の、理想のオカリナづくりを追求していくことだそうです。

新型コロナウイルス感染症が収束して、施設などでの慰問演奏やオカリナづくり教室が以前



自作のオカリナ

カノーロオカリナ工房で



型から出した粘土

オカリナの形ができた



オカリナづくり教室(エルセンター)

教室で使う型と道具



野洲川を渡る風に吹かれて
気持ちよさそうに演奏を披露する安藤さん